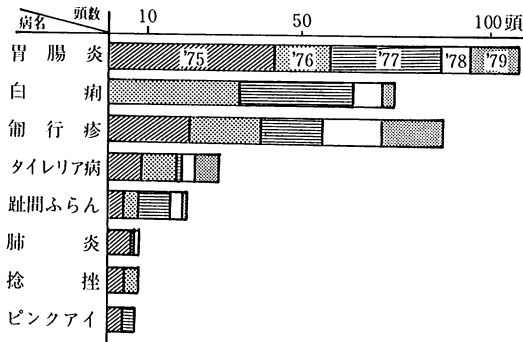


放牧牛の集団管理下における子牛の多発疾病とその対策

竹下有之・鳴川成清・大滝典雄・家入信義・那須利八・恒松正明(熊本県畜産試験場阿蘇支場)

TAKESHITA, Y., N.NARUKAWAN, OTAKI, N.IEIRI, R.NASU and M.TSUNEMATSU : Widespread Diseases of Calves and Their Treatments in a Group Grazing Herd of Cattle

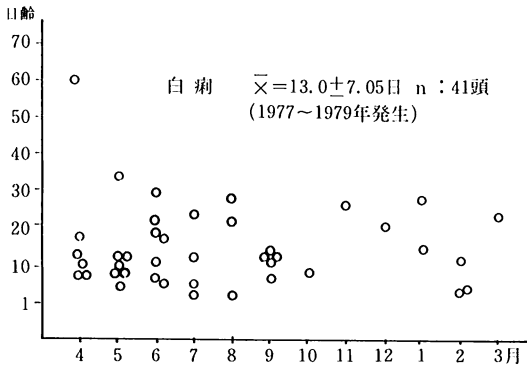
1975年から5ヵ年間に互に総合助成組立試験を実施したが、その試験規模は、肉用牛(褐毛和種(100頭・飼料基盤は改良草地53.1ha・自然草地80.1ha(13haの樹林地含む)で投資抑制型の繁殖経営でしかも周年放牧により子牛の生産90頭以上を目標とした試験であった。この試験期間内に発生した子牛の疾病は、第1図に示すように胃腸炎・白痢・脛行疹・タイレリア病の4疾病で大部分を占め、特に4疾病の中で繁殖経営上大きな阻害要因となった子牛の白痢について発生状況・予防及び治療対策について発表し参考に供したい。



第1図 多発疾病 (1975~1979)

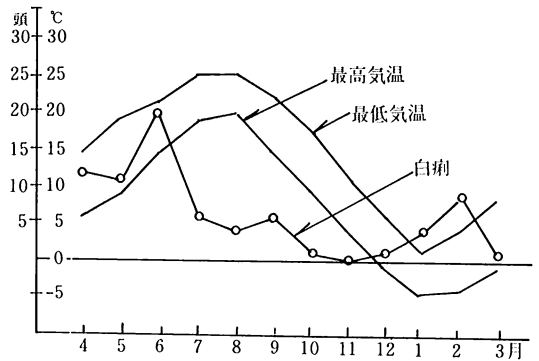
1. 白痢の発生状況

白痢の日齢別発生状況は第2図に示したとおり1977年から1979年までに発生した41頭の平均は生後13±7日齢でありバラツキも少ないことから早期発見も容易で予防及び治療対策も立てやすいように思われる。更に気温との関係を第3図に示したが放牧初期から6月の多湿時期と2月の寒冷時期(サイレージ給与時期)に多発の傾向がみられた。このことは起因菌の増殖に比較的好適なことと



第2図 白痢の日齢発生状況

湿気による子牛のストレスが加わり多発の傾向を示すものと思われる。又、2月のサイレージ給与時期の多発傾向は寒冷感作による子牛のストレスとパドック内及びその周辺草地における牛群の密集化により環境が汚染され多発するものと思われる。



第3図 気温と白痢発生の関係

2. 白痢の臨床所見

子牛は倦怠が現れ哺乳力が弱まる。母牛は乳房の腫脹により光沢を増し不安の徴候を示すと同時に子牛と近距離点で採食し人が近寄るに従い警戒心を増し保護する態度を示す。又、横臥する子牛の周辺草地を調べると鼻をつく不快な臭を伴う灰白色の下痢便を発見する。発見不明の場合でも子牛の肛門周辺に灰白色便を付着するものが多い。多頭飼育の場合患牛不明の場合はピペット(1~5ml)を直腸内に挿入すると白色便が採取されるため発見が可能である。又、罹患牛のヘマトクリット値は38~48%(毛細管法)の範囲であり脱水状態を示す。参考までに放牧子牛のHt値を示すと初乳前は44.3%・2日齢では37.8%・1週齢34.1%である。

3. 予防・治療対策

予防対策として年間を通じ早期発見早期治療を行い抗生物質(アンピシリン製剤)を生後3日齢から3日間経口投与することにより予防が可能である。又、放牧牛(成牛)の血中Mg量は正常値の82%~66%、Pは75%~47%と低位であることが本病に対する何らかの影響があるものと思われるため今後の課題としたい。

治療法は早期発見早期治療を原則としているが、耐性菌の出現が早く現われるように思われるため、感受性ディスク試験を行的確な薬剤を投与することが最も重要である。また、Ht値が40%以上のものについては補液1回量500mlを1日に朝夕2回静注することにより治癒の転帰をとるものが多くみられた。